絵本で子離れ（1）

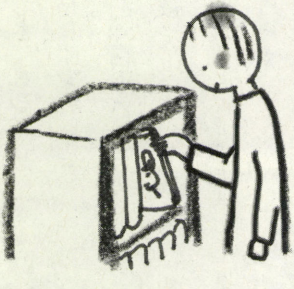
「でも、こうなの」

松井るり子

●絵本でものごとを考える

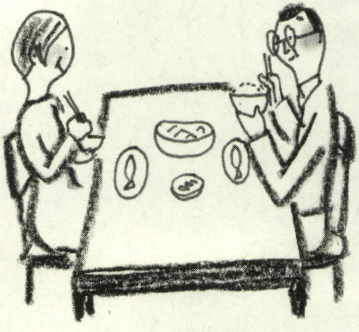
ある日、気がついたら、私の子育て時間が終わっていました。「日付が変わると魔法は消えるからね」と教えられていたシンデレラは、時計の鐘の音と共に、ささーっとお城を去ったので、魔法の解けた姿を衆目から隠して自分を守ることができて、よかったねと思います。私の母親時間は「末っ子の高校卒業まで」と、一応タイマーのセットはしていたのですが、家を出た子がまた戻ってくれるなど、うれしいフェイントに油断するうちにさらに時が流れ、ハッと気づくと、じじばば二人暮らしの未来が、荒野のように広がっているのでした。

夫との二人暮らしは、予想以上に陽気で気楽で、悪くありません。椅子五つが二つに減った食卓はやけに広いですが、これとて残り回数はもう決められていて、いずれどちらか一人のごはんになります。二人のごはん回数は、今日一回使ったら、一回分が



確かに減ったのです。

夫もいいけれど、私が「この人の痛みを私にください」と本気で祈れるのは、自分が産んだ三人の子だけです。それは夫も同じでしょう。お互いさまです。子どもは小さくてよし、大きくてよし、幾つになってもかわいくて、この溺愛を改める気は、全くありません。溺愛しているからこそ、彼らの行く手を阻まぬよう、細心の注意を払っています。



繊細に暮らす最も有効な方法は、「考えること」ではないかと思います。私はそのために、相変わらず絵本や物語を使っています。

●身を捨てる女神への憧れ

子どものころ「大鍋にお湯を沸かし始めてから、畑に行く」という手順でゆでてもらった、とりたてのとうもろこしが、夢のようにおいしかったです。虫食いだらけの、虫の「残しもの」なのですが、味に関して虫の「お墨付き」でもあるわけで、ちょっと気持ち悪いけれど、気持ち悪いところこそがおいしさにつながっているということを、当時から知っていました。自分でごはんを作るようになって、台所で魚の血や内臓やごみや排水溝に毎日触るようになってからは、ますますそう思います。

アメリカインディアンの民話『とうもろこしおばあさん』(秋野和子再話　秋野亥左牟画　福音館書店　一九八二年　品切れ中)は、とうもろこしのいわれを語ります。インディアンが野牛と芋を食べて生きていた昔、長い白髪のおばあさんが、一夜の宿

を頼んでは断られていました。一人の若者が、やっとテントに招き入れてくれた翌日、おばあさんはお礼においしいパンを焼きました。みんな、喜んで食べました。目新しいその材料は、とうもろこしだと告げますが、どこで手に入れたかは言いません。

不審に思った若者がこっそり後をつけました。おばあさんはテントの中で着物のすそをめくって、自分のももを掻きます。するとおばあさんのももから、とうもろこしの粒がぽろぽろとこぼれ落ちて、床にあふれました。

若者はもう、とうもろこしパンが食べられません。自分が見られたと気づいたおばあさんは、若者を平原に連れて行くと、枯れ草を焼いて、私の髪をつかんで灰の上を引きずり回し、最後に私を燃やしなさいと命じました。若者は言われたとおりにします。満月を三度経ると、丈高い草の間からのぞく、おばあさんの髪のような毛の下に、とうもろこしがたくさん実っていました。インディアンはとうもろこしを見ると、おばあさんを思い出し、一粒も無駄にしないで大切にしています。

とうもろこしの黄色い粒が「ももからぽろぽろ」はがれ落ちてくるという、強烈なモチーフにガーンとやられて、ほかのところがかすんでしまいます。それでも不思議と、食べること、生きること、死ぬこと、栄えることの中に、しみじみと入っていける気がして、好きなお話です。

これに似た多くの話では、秘密が暴かれると「見・た・な・あ〜」となって、暴いた者がとって食われてしまう気がしますが、この若者は生き、おばあさんのほうが文字どおり「とって食われる」ことになりました。しかも、私の髪をつかんで引き回し、私を焼き殺せとは、何ともダイナミックな命令です。私も自分がいつか死ぬことはさすがにもうわかっているつもりですが、「何とかちょっとでも苦

しくない方法でよろしく」と常に願っています。おばあさんのこういう命令には、「私とはレベルの違う、崇高な人がいる」と思わされます。

おばあさんは自分自身が大事にされるよりも、とうもろこしが大事にされることで、人間たちの未来が長く守られていくことを願っていました。こういう人が、本当の女神さまなのでしょう。

●髪の着替え、顔の着替え

子育て中に何度も見た定番の夢の一つに、「もうすぐ卒業式が始まるのに、着ていく服がない」というのがありました。

夢の中で私は今日卒業する学校にいて、在校生は入場を始め、まもなく「卒業生入場」になるのに、私は何だか変な格好で、着るべき服は家に置いてきてしまっています。家に電話するのですが、戻るのが遅いダイヤル式の長い長い電話番号を、あと一個回せばよいというところで、必ず間違えるのです。それにもし電話が通じたとしても、どこにあるどの服なのかを、簡潔に説明できるとは思えません。

あるいは今日は卒業式で、私はそろそろ家を出なくてはいけない時間なのに、まだ部屋着で自分のタンスを引っかき回しながら、着るものがない、着るものがないと、大焦りに焦っています。欠席するしかないのか？　いや、最後だもの、どうしても出たい。では普段着で出るのか？　それは嫌……。バリエーションはいろいろながら、あまりにも頻繁に見る夢で、しかも毎回その焦りが苦しくて仕方がないのでした。

何度かの現実の「卒業」を経て、いままでとは違う何者かにならねばならないらしい私が味わう、「何を着ていいかわからない」「服がない」「卒業式に出られそうにない」という夢の中の状況は、結構現実と重なっていたかもしれません。なすべき学業

の到達度が低い、この先どういう自分として振る舞えばいいのかわからない、行動様式がまだない、というあたりに、思い当たる節があります。

フェリックス・ホフマンの描くグリム童話『おやゆびこぞう』（大塚勇三訳　ペンギン社　一九七九年　品切れ中）が、両親に最初に作ってもらったのは、黄土色のセーターと、おそろいのニット帽、海老茶の靴下に、空色のつなぎズボン、灰色のブーツでした。かわいいです。

貧しい親を助けるために、自ら売られていったおやゆびこぞうは、見せ物のために人身売買をする二人組の男をだまし、泥棒二人組をやっつけ、のまれた牛の腹とオオカミの腹から抜け出して、無事、親の元に戻りました。長旅の苦労で、これまでの服がぼろぼろになっていたので、新しい服をまた一そろい作ってもらいました、というところでお話が終わります。

「新品の服でおしまいなの？」と、コケました。今度の服は、れんが色のセーターとズボン、緑の靴下に空色の帽子、茄子紺のかっちりジャケットに茶色のブーツで、前より少し大人びた感じがします。以前のものが春夏の色合いとすると、今度のは秋冬の色目といえるかもしれません。

でも、こぞうの体は、相変わらず小さいままでした。結婚もしませんでした。それでも時は流れたのです。大きくならないおやゆびこぞうですが、不老不死を授かってはいません。お話を前に進めた分だけ、彼も死に近づきました。朝を始まりとすれば夜に、春を始まりとすれば冬に近づきました。

午後になれば、影は昼前とは違った方向に伸びるし、秋には動物も植物も冬じたくに入ります。中学・高校を卒業したら、それまでの制服はもう着ません。働くようになったら、学生風の服は着なくなりました。ウェディングドレスを着た後の私は、いき

なり「奥さん」で、マタニティドレスを着た後の私は「母」でした。おんぶひもやねんねこの後はベビーカーで、その後はいつも大荷物で、ハイヒールはしまい込んでいました。子どもの手を引かなくなったら荷物は小さくなり、出してきたハイヒールのサイズは合っても、履く気がうせていました。

自分が置かれた状況にふさわしいものを着ることで、それらしくなってきました。とりあえずのコスプレで、「過去に置いてきた私」を、自分にはっきり言い聞かせたのかもしれません。

「母」をほとんど卒業した五十代のいまでは、さすがにもう卒業式の服の夢には悩まされません。いまの作業は、毎日順調に老いてゆく自分を、ちゃんと受け入れた、服や髪型を選ぶことです。近ごろ、子どもたちが、私の白髪を気にします。私は簡単にかぶれる体質なので、髪を染める気はないと以前から宣言しているにもかかわらず、「おかあの白髪が増えた増えた」と、何度も文句（というより、いたわりのつもりなのでしょうけれど、抗議に聞こえる）を言ってきます。

自分では、全体にぼやーっとして、三十代の寝起きの顔が常態になってきた五十代の顔に、緑の黒髪の額縁を付けたら、ちぐはぐだと思います。この顔には白髪混じりのほうが似合って、とってもいいなあとわれながら感心しているのに、子どもたちは嫌みたいです。つまりは、「こら。おかあはそのままでいろー。勝手にずんずん、ばあさんになるな」と言われているのがわかります。

返事は「でも、こうなの」です。こうして何となく、か弱いほうに向かう私を子どもたちに見せておくのもいいかなと思っているところです。親がダメなほうに進んでいくなら、子どもが自分でしっかりするよりほかに、選択肢がないですものね。

（文筆業）